



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

（第一三〇号）

立夏 りっか  
五月五日

# 石灰

神路山かみじやまの一つ、八幡宜山は、伊勢市と南伊勢町の境にある標高四二〇メートルあまりの山です。はねぎ、はちねぎ、さらにやつねぎと呼ばれる山です。内宮宇治橋前から五ヶ所街道を車でさかのぼること約四〇分、剣峠から登り始めます。

ちょうど神宮の宮域林と民有地の境を行く登山道ですが、途中に一メートル四方の炭焼き窯の跡も残り、地元の人々との関わりの深さを目の当たりにしました。今も民有地の方には上質の備長炭になるウバメガシが多く生育しています。

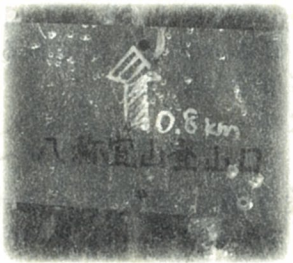
そして、目についたのが所々にある白っぽい砂利です。同行してくれた古老にうかがうと、地元では骨の石と呼び、石灰岩せっかいかんであることを教えてくれました。

後で調べてみると、伊勢志摩地方には石灰岩の層が神島から安楽島あらくしまを経て、志摩市磯部町へ広がり、さらに伊勢市の島路山しまじやまから矢持町やもち、南伊勢町へと分布しています。前回紹介した高麗広こうらいひろを開墾した宮島丑松さんも磯部町で石灰いしばいを製造していたという記述があり、このあたりの地質の特徴であることがわかりました。

三重県には石灰層があるため、古くから石灰が製造され、明治時代には、県の主要産業でもありました。石灰は主に水田の肥料として使われました。干鰯ほしかなどの肥料に比べて安価で、作物がよく育ち、害虫の駆除に効果があると考えられていたからです。

しかし、川魚が減少する状況や西洋農学の知識が入ってくると、長年石灰だけを多用すると、田の栄養分が減り、やがて何も実らなくなるとされ、大きな問題となったようです。

炭焼きに、水田の肥料の石灰。どちらも人々の生活には欠かせないものが、山にはあったのでした。



文 千種清美

